

## 止まり木



## いま、旅立ちのとき

本日の卒業式で、卒業生に贈った式辞を紹介いたします。



## 式辞

「当たり前のその先へ」を実践し、かけがえのない三年間を駆け抜けた第四十二期生、百二十名の卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。また保護者、ご家族の皆様、本日は、お子様のご卒業、本当におめでとうございます。教職員を代表して心からお祝い申し上げます。さらに本日は、日頃より子供たちや学校を温かく見守っていただいているご来賓の皆様にも数年ぶりにご臨席賜り、感謝申し上げます。高いところからではありますがお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、卒業生の皆さん、今、一人ひとりに卒業証書を手渡しました。みなさんとはたった二年間の付き合いでしたが、感慨深い気持ちでいっぱいです。皆さんは様々なハンデをものともせずいろんな場面で私たちに感動を与えてくれました。そして横堤中に後輩が先輩を目指すという「憧れの文化」を築いてくれました。修学旅行では「当たり前のその先へ」を合言葉に自分にできることは何かを考えて考動し、節度ある中で存分に楽しんでいました。私たちは当たり前のことはもうできている。だからその先を目指すんだという皆さんの心意気を感じる修学旅行でした。体育大会では自分に与えられた役割を完璧に行うため、徹底して練習している姿に皆さんの強さを見ました。中でも初めて挑戦した集団演技の「南中ソーラン」は忘れることはできません。

「かまえ」の凛とした声でグラウンドの空気を一変させて始まった圧巻の演技は、本気でやるカッコよさを後輩たちに、その背中で見せてくれました。さらに、合唱コンクールでの美しいハーモニー。これも初めての取り組みとなる学年全体合唱で仲間とともに一つのものを創り上げるすばらしさを示してくれました。こんな風に色々なことを思い返していると、もっともっと皆さんと横中での生活を過ごしたかったなあと思います。しかし、残念ですがお別れの時です。そして旅立ちの時です。そんな巣立ちゆくみなさんに期待を込めてお話ししたことがあります。

今年は皆さんも知っての通り、一万円札をはじめ紙幣の肖像画が変更になります。一万円札は渋沢栄一氏となりますが、この人は坂本龍馬とほぼ同時代を生き、「近代日本経済の父」と称されました。幕府の欧州視察の随行員に抜擢されて渡欧すると、先進的な技術や産業を見聞し、近代的な社会制度を知った事が、その後の栄一の人生に大きな影響を与えました。欧州から帰国した栄一は、明治政府に招かれ、新しい国づくりに関わりました。その中の一つには、世界遺産となっている富岡製糸場の設立があります。その後には第一国立銀行（現在のみずほ銀行）の総監役（のちに頭取）となり、民間人として経済による近代的な国づくりを目指しました。また、東京商法会議所（現・東京商工会議所）、東京証券取引所といった多種多様な会社や経済団体の設立・経営に関わりました。儲けのみを求めるのではなく、世のため人のために働いて儲ける、つまり公共の利益を追求することで、皆が幸せになり、ひいては国が豊かになると考え、実践した栄一は、多くの人に惜しまれながら91歳の生涯を閉じました。そんな渋沢栄一が残した言葉に夢七訓というものがあります。

夢なき者は理想なし

理想なき者は信念なし

信念なき者は計画なし

計画なき者は実行なし

実行なき者は成果なし

成果なき者は幸福なし

故に幸福を求むる者は夢なかるべからず

たとえ小さくても夢を持つことが幸せへの第一歩となることを教えています。体育館前に「翔」の花文字が掲げられています。1年生が、3年生のみなさんと、この春に入学する新入生に贈る言葉として、この字を選び、思いを込めて制作しました。みなさん一人ひとりが、自分の夢に向かって、今日この場から力強く羽ばたいていってくれることを願っています。そして皆さんはこの体育館での最後の卒業生です。その目にしっかり焼き付けておいてください。

では、卒業生の皆さん、横堤中学校はこれからも「止まり木のような学校」としてみなさんを見守っています。何かあったらいつでも力を蓄えに来てください。在校生も皆さん同様しっかり足跡を残してくれると信じています。安心していてください。最後に皆さんの輝かしい未来に夢を託し、私の式辞といたします。

令和六年三月十三日

大阪市立横堤中学校 校長 田中 城明